

癌治療における漢方の役割

東海大学医学部
新井 信

【講師略歴】

東京女子医科大学付属東洋医学研究所 医局長を経て
現在、東海大学医学部内科学系准教授（東洋医学）

昭和 33 年 埼玉県 秩父市生まれ
昭和 56 年 東北大学薬学部 卒
昭和 63 年 新潟大学医学部 卒

医師、薬剤師

医学博士、総合内科専門医、漢方専門医・指導医

藤田保健衛生大学医学部客員教授、早稲田大学非常勤講師

新潟大学医学部非常勤講師、横浜市立大学非常勤講師

聖マリアンナ医科大学非常勤講師、東北大学薬学部非常勤講師

昭和薬科大学非常勤講師、防衛医科大学校非常勤講師

和漢医薬学会理事、日本医学教育学会代議員

国際東洋医学会日本支部評議員、日本漢方医学教育協議会幹事

日本東洋医学会、日本内科学会、日本消化器病学会

平成26年9月19日

東京都薬用植物園『薬草教室』

癌治療における漢方の役割 ～自然治癒力を最大限に引き出す～

東海大学医学部東洋医学講座 新井 信

I. 日本における漢方治療の現状

- ・西洋医学を学んだ医師と薬剤師だけが漢方治療を実践できる（免許の一本化）
- ・保険医療制度の中で、西洋医学治療と同時に漢方治療を行うことができる
- ・漢方エキス製剤が広く普及している
- ・エキス治療も生薬治療（煎じ薬）も健康保険で取り扱われる
- ・医療機関の標榜科として「漢方内科」などが認められている
- ・地域医療に携わる医師の97%が漢方薬の使用経験を持つ

〈メモ〉

II. 西洋医学と漢方のパラダイムの違い

1 『神農本草経』にある上薬・中薬・下薬とは

	意 味	目 的	特 徴	生 薬
上薬	命を養う	軽身益気、不老延年を得る	無毒 長期連用が可能	人參、黄耆、大棗、甘草 など（120品）
中薬	性を養う	発病を抑え、虚弱を補う	無毒なものと有毒なもの とがある	当歸、柴胡、麻黄、芍薬、 葛根など（120品）
下薬	病を治す	病気を治療する	多毒で副作用がある 長期連用しにくい	大黄、附子、半夏、水蛭、 しゃ虫など（125品）

- ・不快な自覚症状を改善することが治療のゴールではない！
- ・漢方治療の究極の目的は「不老長寿」（軽身益気、不老延年）である！

〈メモ〉

2 不老延年は可能か？

上古之人、其知道者、法於陰陽、和於術數、
食飲有節、起居有常、不妄作勞、
故能形與神俱、而盡終其天年、度百歲乃去。
今時之人不然也。以酒爲漿、以妄爲常、
醉以入房、以欲竭其精、以耗散其真。
不知持滿、不時御神。務快其心、逆於生樂、
起居無節。故半百而衰也。

〈メモ〉

（『黄帝内経』素問・上古天真論篇第一）

- ・凡人は飲食や色情に溺れるから天から与えられた100年の命を縮めている
- ・心身のアンバランスを正すと人間は100歳まで生きられる

3 不老延年を得るための方策

天生陰陽、寒暑燥濕、四時之化、
萬物之變、莫不爲利、莫不爲害。
聖人察陰陽之宜、辨萬物之利、
以便生。故精神安乎形、而年壽
得長焉。長也者、非短而續之也。
畢其數也。
畢數之務、在乎去害、何謂去害。
大甘大酸大苦大辛大鹹、五者充
形、則生害矣。大喜大怒大憂大
恐大哀、五者接神、則生害矣。
大寒大熱大燥大濕大風大霖大霧、
七者動精、則生害矣。故凡養生、
莫若知本。知本則疾無由至矣。

【意識】

長寿ということは、本来短い寿命を長くするという
ことではない。本来備わっているところの生命を十分に
発揮させる、すなわち天寿を全うすることである。
天寿を全うするためには、それを妨害するものを取り
除いてやらなければならない

長也者：長寿

非短而續之也：短いものを継ぎ足しているのではない

畢其數也：天寿を全うする

（『呂氏春秋』 卷三 季春紀 呂不韋〈秦の宰相〉著 B.C.239）

〈メモ〉

4 治療における基本的姿勢の違い

○西洋医学

病変部・検査異常 → 病気と闘う、病気を排除する → 病変部へのこだわり

○漢方

不快な自覚症状 → 病む人を癒やす、自然治癒力を高める → 健常部分にも着目
→ 未病を治す

〈メモ〉

Ⅲ. がん治療の方法

○主な西洋医学治療（3 大療法）

外科療法、放射線療法、抗がん剤治療（化学療法、分子標的治療）

○その他の西洋医学治療

温熱療法（ハイパーサーミア）、サイトカイン療法、ホルモン療法（内分泌療法）、
遺伝子治療、免疫療法（細胞免疫療法・活性化リンパ球・リンパ球移入法）、抗体療法、
穿刺療法、凍結療法、ワクチン療法、生体応答調節剤（BRM）療法、ステント留置術、
造血幹細胞移植療法（骨髄移植・臍帯血移植）、肝動脈塞栓術（TAE）など

○代替医療

漢方、鍼灸、植物療法（メシマコブ、アガリスクなど）、アロマテラピー、気功 など

〈メモ〉

Ⅳ. 西洋医学におけるがん治療の標準的な考え方

1 西洋医学的に治療法が確立しているものはそれを優先する

- ・外科切除術と補助的治療（放射線療法、化学療法、ホルモン療法など）
- ・放射線療法
- ・抗がん剤治療（化学療法、分子標的治療）
- ・骨髄移植 など

- 2 根治でなくても症状緩和のために西洋医学治療が有効なものは積極的に行う
 - ・姑息手術（人工肛門、胃瘻など）
 - ・癌性疼痛に対する緩和医療
- 3 補助的治療を適宜行う
 - ・化学療法（抗がん剤）の副作用に対する治療
 - ・手術による後遺症（腸閉塞など）の治療、機能障害に対するリハビリテーション
 - ・精神的ケア

〈メモ〉

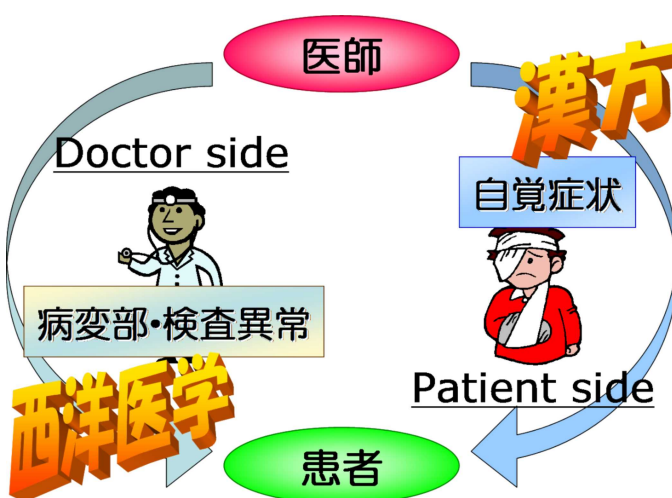
V. がん治療に漢方薬が使えるか

1 漢方治療の適応

西洋医学	器質的異常を主とする例 西洋医学的治療で速やかに改善する可能性の大きい例 悪性腫瘍などで手術適応の明確な例 緊急度が高い例
漢方	機能的異常を主とする疾患 虚弱体質、無力性体質者:「風邪をひきやすい」など 免疫異常が関与あるいは疑われる例 症状を説明できるだけの検査所見の異常がない例 心身症傾向のある例 西洋医学的治療で副作用を生じやすい例:高齢者など 西洋医学的治療の無効な例

〈メモ〉

2 漢方と西洋医学の使い分け



治療の主たる目標

西洋医学：病変部・検査異常

漢方：自覚症状

がん（早期も含む）

→ 第一義的には西洋医学の適応

〈メモ〉

Ⅵ. 漢方治療の特徴

西洋医学と異なった体系を持つ「もう1つの医学」である

- ① 自覚症状の軽減が治療の主目標である
生活の質（Quality of life：QOL）を高めることができる
- ② 局所だけではなく全身をみる
特に消化管機能の向上に優れた効果がある
- ③ 免疫能を向上させて自然治癒力を高める
補剤（補中益気湯、十全大補湯、人參養榮湯など）を用いる機会が多い
- ④ 「証」と言われる複数の症候を同時に治療する
- ⑤ 副作用が少ない

〈メモ〉

Ⅶ. 未病を治す

1 西洋医学からみた未病

1) 定義

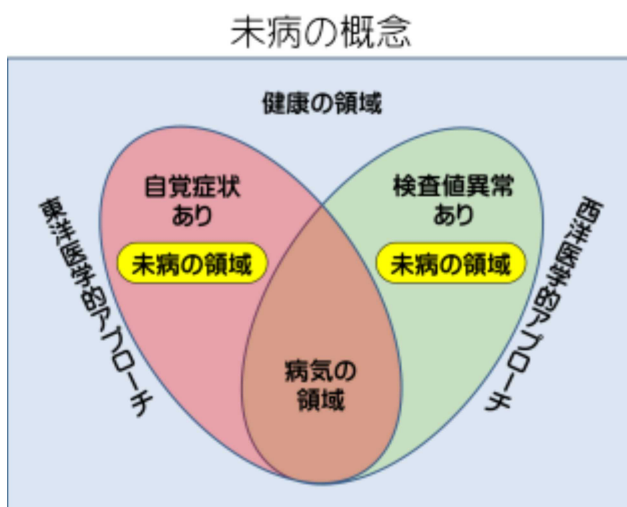
「病気と健康の間」

「東洋医学において、検査を受けても異常が見つからず病気と診断されないが、健康ともいえない状態。放置すると病気になるだろうと予測される状態をいう場合が多い。」（大辞泉）

「病気ではないが、健康でもない状態。自覚症状はないが検査結果に異常がある場合と、自覚症状はあるが検査結果に異常がない場合に大別される。骨粗鬆症、肥満など。」（スーパー大辞林）

〈メモ〉

2) 未病システム学会の定義



西洋型未病：

自覚症状はないが検査で異常がある状態

東洋型未病：

自覚症状はあるが検査で異常がない状態

→ 以上を合わせて「未病」としている

病気：

自覚症状でも検査でも異常がある状態

病気予備軍＝未病期

〈メモ〉

2 東洋医学でいう未病

「未病を治す」

疾病発症前のどの段階を治療対象としているかで少なくとも3つの意味を持つ

①疾病に対する予防

- ・疾病を引き起こす原因となる邪気がまだ人体にまったく関与していない段階で、あらかじめ身体側の生体防御機構を高めて備える
- ・『素問』刺法論篇：
疫病が発生した場合の感染予防対策に鍼治療や薬物内服治療が示されている
- ・予防医学的、公衆衛生学的な意義

〈メモ〉

②早期治療

- ・疾病が明らかな徴候となって身体や精神に現れる前の段階において、わずかな予兆からそれを察知し、その段階で治してしまう
- ・『素問』刺熱論篇：
「肝の熱病なる者は、左の頬先ず赤らむ。心の熱病なる者は、顔先ず赤らむ。脾の熱病なる者は、鼻先ず赤らむ。肺の熱病なる者は、右の頬先ず赤らむ。腎の熱病なる者は、頤先ず赤らむ。病、未だ発せざると雖も、赤色を見わす者はこれを刺す。名づけて未病を治すと曰う」
- ・早期発見、早期治療という意義（時間的広がりとしての未病）

〈メモ〉

③疾病の発展的傾向を掌握すること

- ・疾病は発症した後にもさらに進展して他の臓腑を侵すため、この発展傾向を掌握して先手を打つ
- ・『金匱要略』臟腑経絡先後病篇：
「上工は未病を治すとは何ぞや。師の曰く、夫れ未病を治す者は、肝の病を見て、肝脾に伝うるを知り、当に先ず脾を実すべし」
- ・全身管理的な意義（空間的広がりとしての未病）
病的部位に過度にとらわれず、未病的部位にも着目し、その部位の予防、予備力維持、健康増進を図ることができる

〈メモ〉

3 「未病を治す（治未病）」のがん治療への応用

①疾病に対する予防

漢方薬は全般に身体の免疫力を高める

②早期治療

がん自体ではなく、背景病態の早期発見、早期治療という意味で漢方は役立つ

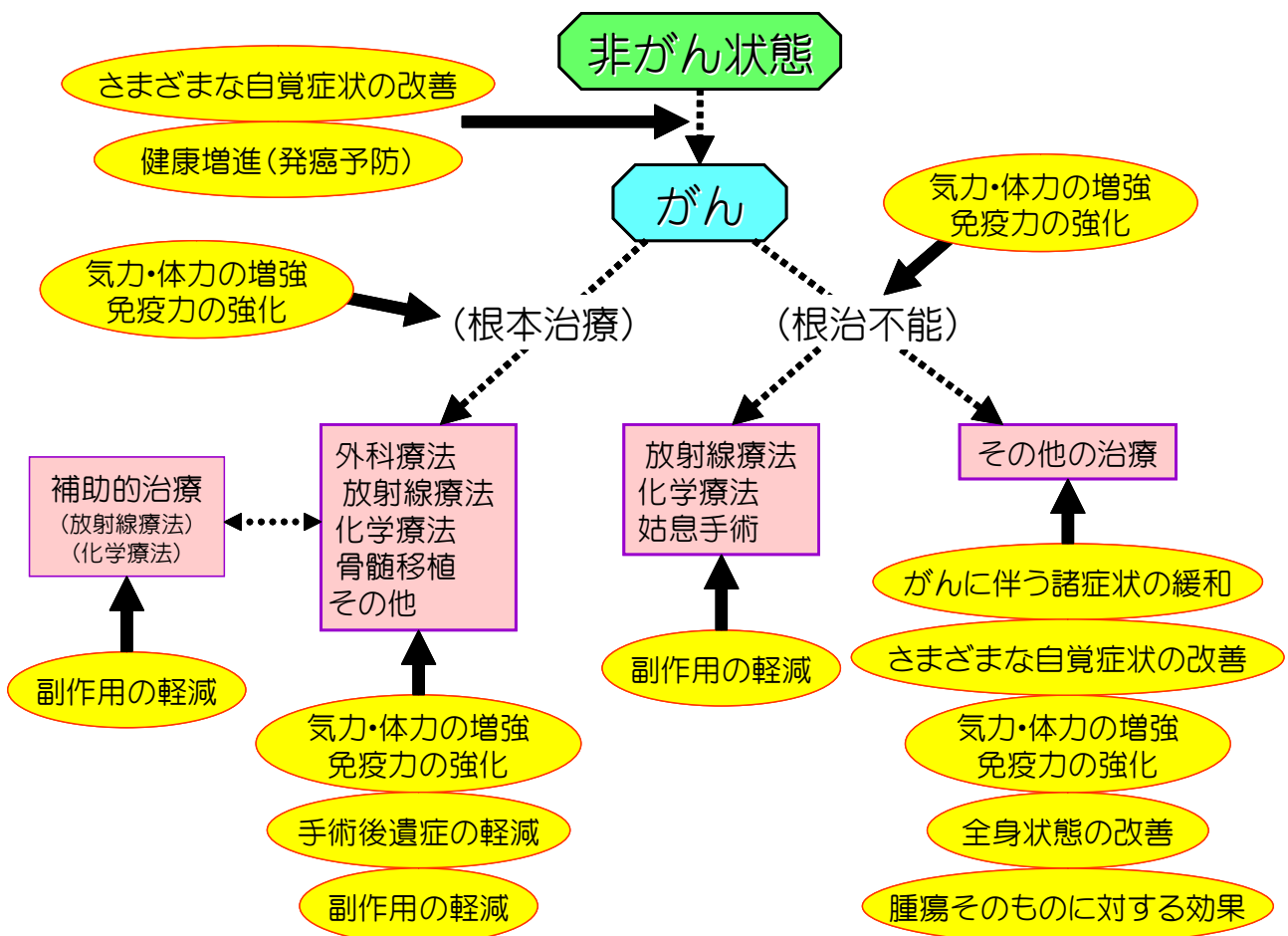
③疾病の発展的傾向を掌握すること

漢方は局所にとられない全身を診る治療法（全人的医療）である

特に消化器系（胃腸）の補強を重視している

〈メモ〉

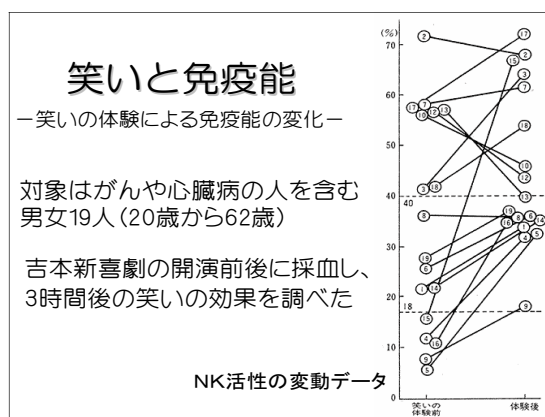
VIII. がん治療における漢方治療の役割



〈メモ〉

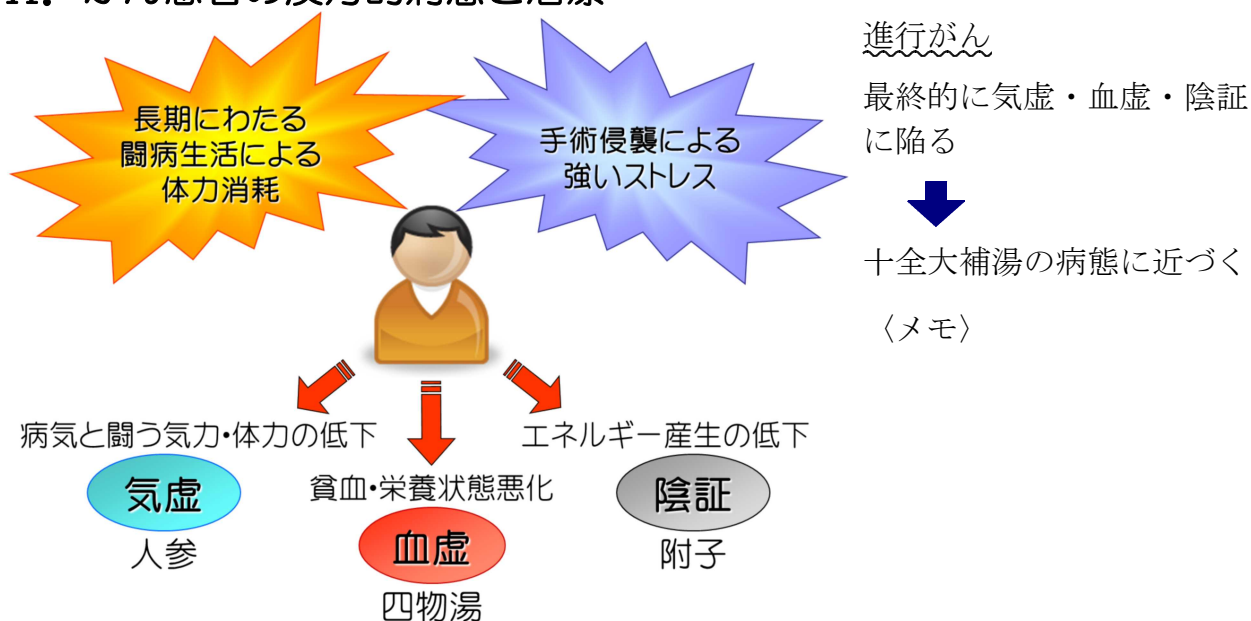
IX. 東洋医学から考える治療の基本方針

- 1 「気」の充実
 - 気功
 - 生き方の変換、プラス思考
 - 2 精神的な安定
 - リラックスした気分で過ごす
(副交感神経優位な状態を作る)
 - 楽しい気分にする → 笑いの健康法
 - 3 漢方薬の服用
 - 主として補剤を用いる
 - エキス剤を白湯に溶いて味わって飲む
 - 4 鍼灸
 - 特に灸が効果的
 - 5 食の充実
 - 栄養のバランスが取れた食事内容
(肉類を少なめ、ビタミンやミネラルが豊富なもの、アルコールは適量可 など)
 - 食べ方の工夫
(よく噛んで食べる、ゆっくりと味わって食べる、ありがたく感じて食べる など)
 - 6 日常生活の改善
 - 規則正しい生活、身体を冷やさない、タバコは不可
- 〈メモ〉



伊丹仁朗、他. 心身医学 34(7): 565-571

X. がん患者の漢方的病態と治療



XI. よく用いる漢方薬と使い方

1 気力や体力の増強

補中益気湯 (ほちゅうえききとう)：だるさ強い場合の第一選択薬

顔色が悪ければ四物湯 (しもつとう) を併用する、あるいは十全大補湯にする

十全大補湯 (じゅうぜんたいほとう)：貧血／栄養状態不良／皮膚乾燥

癌治療において自己側に働いて免疫力をアップするための第一選択薬である

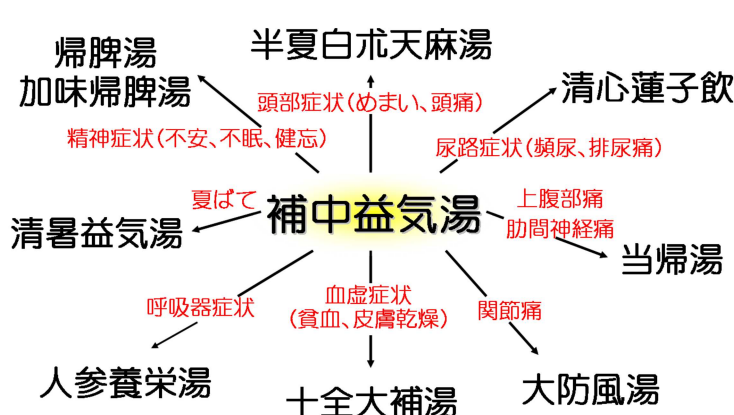
人参養栄湯 (にんじんようえいとう)：呼吸器症状 (咳・痰など) ／微熱

加味帰脾湯 (かみきひとう)：気力体力の甚だしい低下／抑うつ、不眠、不安など精神症状

帰脾湯 (きひとう)：気力体力の甚だしい低下／六君子湯や補中益気湯でも食欲が出ない

半夏白朮天麻湯 (はんげびやくじゅつてんまとう)：めまい／立ちくらみ／頭痛 (頭重)

清心蓮子飲 (せいしんれんしん)：頻尿／排尿時不快感／膀胱神経症



共通症状 ◎全身倦怠感 ◎易疲労 ○食後の眠気 ○寝汗

人参黄耆剤 (補剤)

人参と黄耆を含む処方群

2 胃腸症状の改善

六君子湯 (りくくんしとう)：食欲低下／胃もたれ

抑うつ的であれば香蘇散 (こうそさん)、腹痛があれば柴胡桂枝湯 (さいこけいしとう) を併用する

人参湯 (にんじんとう)：慢性下痢／手足の冷え／食欲低下

真武湯 (しんぶとう)：慢性下痢 (未消化便・排便後倦怠感) ／身体が重い／顔色不良

大建中湯 (だいけんちゅうとう)：腸閉塞／腹部膨満 (ガス貯留)

腹痛が強いものや効果が不十分なものには桂枝加芍薬湯 (けいしかしゃくやくとう) を併用する

半夏厚朴湯 (はんげこうぼくとう)：再発不安感／胸部圧迫感／咽喉頭異物感／吐き気

半夏瀉心湯 (はんげしゃしんとう)：胃部膨満感／腹鳴／げっぷ／抗癌剤による下痢

〈メモ〉

3 免疫能の維持向上

小柴胡湯 (しょうさいこうとう)：比較的体力がある／胃腸が丈夫／胸脇苦満 (季肋部が重苦しい)

桂枝茯苓丸 (けいしぶくりょうがん) や四物湯 (しもつとう) と合方すると効果的なことがある

十全大補湯 (じゅうぜんたいほとう)：貧血／栄養状態不良／皮膚乾燥

〈メモ〉

XII. 十全大補湯を用いたがん治療の臨床研究

- 1 胃癌術後の 5-FU 経口剤投与時、特に Stage III および Stage IV の症例に対しては、十全大補湯投与群に有意な生存期間の延長が認められた。

(山田卓也：Prog.Med.24 2746-2746,2004)

〈メモ〉

- 2 放射線治療を受けた子宮頸癌症例（十全大補湯併用群 74 例、非併用群 231 例）に対し、十全大補湯は延命効果を認めた。

(居村暁ほか：消化器外科 3199-108,2008)

〈メモ〉

- 3 肝癌術後、十全大補湯投与群(11 例)では、非投与群(36 例)に比べて再発率が有意に低く、肝癌再発抑制効果が確認された。

(河野寛：消化器外科 31 99-108,2008)

〈メモ〉

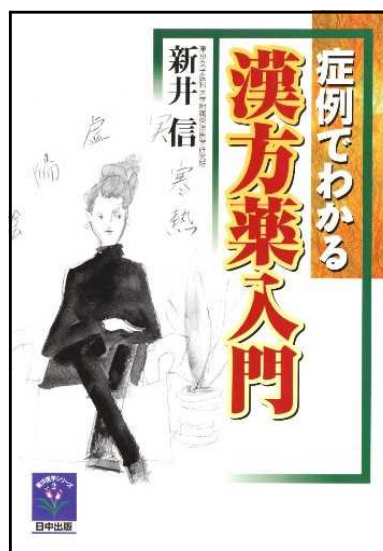
XIII. 漢方によるがん治療の臨床治験例

- 1 炎症性乳がんの痛みと熱感に温清飲 (うんせいいん)

〈メモ〉

- 2 急性リンパ性白血病の化学療法による副作用（発熱と嘔気）に柴胡桂枝湯 (さいけいしとう)

〈メモ〉



新井信 著『症例でわかる漢方薬入門』（日中出版）